

第5号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十二年二月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

明達光輝

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍した。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・柳歌・短歌・俳句・川柳）・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長  
編集長

大西 生一



目次

隨筆……暑い夏アラカルト	高阪	博一	1
俳句……よく笑う	彩	華	8
短歌……俳句……街路樹ロマン	高島	成子	10
俳句……京の秋	彩	華	11
老人日記2……百天翁伽			13
川柳……柴小路	秀磨		19
嘘つきメール……他……令月			22
詩「願掛け」……大西裕子			26
短歌……水田竜子			29
病気の事情……高島成子			29
競演 第二回	ほし		32
編集室から			49

◆ 第4号の「特集」にたくさん原稿をいただいた、掲載しきれなかった分を今号回しとした。真冬だが、暖かくした部屋でどうぞ。

## あつい夏アラカルト

高阪 博一

今年の七月で六十二歳になった。四季ではなくて、夏抜きの三季に何故ならぬかと空を見上げることが年々多くなってきた。

若い時分はそんなことを全く思わなかった。長い休みのある夏は一番の季節であった。今はただ御免蒙ゴメンヨウズりたいと思うばかりだが、夏は確実にやってくる。情け容赦などありはしない。

さてさて、六十二回目の《あつい夏》はどんな顔をしていたのだろう。心に残った三つ顔を書いてみたいと思う。

【暑い夏】

私の部屋は二階の西向きである。ひとり息子が震災の翌年に下宿生活をするようになり、その一部屋が空いていた。時々、帰ってくるのでそのまましておいたが、三年ほど前に家庭を持ったため、読書が出来て音楽が聴ける、それにパソコンもできる私の快適空間に変えた。

今年の三月に退職し、そこに居ることが多くなった。去年は初めての生活に気を取られていたせいか、それほど感じなかつたが、暑いのである。午後二時頃から汗が噴出してきてサウナ状態。運動不足の身にはダイエット効果があると皮肉な溜息をつく。四時以降は阿弥陀様の光が降り注ぎ、西方浄土とはこんなに暑いものかと思ってしまう。

クーラーをかければ済むことだが、体調と昨今のエコを考えて、出来るだけかけないようにしている。それなら、音楽で涼しくなろうと、CDを買ってきて聴いてみる。『白鳥の湖』や『四季の冬』である。いつこうに涼しくならない。こんなことで涼しくなる筈はないと思いつつ、背に腹は変えられぬ心境である。

部屋を変えれば良いと家を見渡してみる。そんなスペースはなく、リタイアーの身には先だつものもない。ないないづくしで、モオーとばかりに地球温暖化を呪ってみる。しかし、これまでの便利な生活を思うと、温暖化も仕方がないのかと思ってしまう。

いつそ正反対の戸外で爽やかな汗をかくという事が思い浮かぶ。ゲート・ボールにグランド・ゴルフ、どうもただだけない。寿スポーツにはまだ早すぎる。かといつて、歳の自覚は充分持っている。孫と写っている写真を見ると、お父さんではない、どう見てもお祖父さんだ。

《心頭を減却すれば……》という一節が頭をかすめた時、大西先生のニヤリと笑う顔が浮かんできた。そうだ、原稿に熱中すること、そうすれば暑さは何処かへ飛んで



行つてしまふ。やるぞ、書くぞ、書き上げるぞと力んだ途端、また、滝のような汗が噴き出してきていた。

【篤い夏】

我が家に隣接して墓地がある。引つ越してきた十五年前は大きな木の周りに、草に隠れた小さな墓標が点在している村の墓地という感じの所であつた。七、八年前、それが三百程度に区画された霊園となつた。

八月も半ばになると賑やかことこのうえない。朝はお経を唱える声や鈴リンの音で目覚めることがある。昼にかけては花を手向ける家族連れの声が騒々しい。涼しくなる夕方にかけても同様である。

何といつても夜中が最も騒々しく、こんな声を聞く時がある。「鈴木さん、ご無沙汰、元気やった?」「元気元気、佐藤さんも元気そうやね」「鈴木さんどこ、まだ来ないようやね、花がないね」「そやねん。うちの息子、道楽もんやから、忘れてんねやわ、

きつと。しゃーない、こつちから行つたろ」「そうし、そうし」とこんな具合である。エー、私は靈能者か。

八月も二十日を過ぎるといつもの静かな靈園に戻る。強い光に白く光る墓標と褐色に乾涸びた花が幾列も並ぶ。靈達も帰つていった石だけの場所を家の二階から見渡しながら、今年は墓参りをしなかつたことに気付く。だが、仏壇の父母の遺影に語りかけることは多くなつたような気がする。

二十数年前、七十に満たない歳で相次いで逝つた父母。四十そこそこだろうか、樂しそくに二人寄添う遺影を見ながら、家族のこと、姉弟のことなどをいろいろと報告する。すると、父母がそこにいるような気になることがある、決して、物言うことはないのだが。

忘れぬこと、惚ぶこと、これが供養することではないかと思つた。そうすると、今年は篤い夏を送つたことになる。寄添う二人はどう思っているだろう。「当分はそつちに居りや、こつちに來たらあかん。邪魔や、二人で楽しんでるのに」と微笑んでいるように見

えた。

【熱い(はずの)夏】

八月三十日に衆議院選挙があり、民主党が第一党となつて、自民党がその座を滑り落ちた歴史的な日となつた。選挙権を得て六十二歳になるまで、自民党に投票したことはない。権力を持つと兎角恣意に陥り、墮落してしまう。五十数年持ち続ければ当然のことと思うのだが、今まで一向に変わることはなかつた。

わくわくするような熱い気持ちでテレビの開票結果を待っていると、番組が始まるや否や、当確のテロップが次々と出て、三十分もせぬうちに、政権交代が分かつてしまった。これはもう拍子抜けである。

学生時分は嫌というほど、一票では変らないことを思い知らされた。それはこの四十数年変ることはなかつた。投票毎に空しさを感じつつ、次は次はと思つていた。それが変つたというのに。

自民党の末期的な症状や都議選等の前哨戦の結果から、民主党の圧勝が伝えられていた。結果は高い確率で予想されていたとはいえ、余りにも高揚感がなすすぎる。つまり熱くないのである。

この歳になると、残り少ない時間を安穩に暮らしたいという思いが強い。生きている間は、年金は大丈夫だろう、温暖化が進行したとしても、播磨灘の海水が家を浸すことはないだろうと考えてしまう。

残虐な王様が勝手気儘に支配するのではない限り、生活の激変はあり得ない。政権の変化によつて多少の違いは生じようが、JRで三宮に行くか、山電で三宮に行くかの違い程度だろう。どうも、昨今の《チェンジ》ということと無縁の世界にいるようだ。

熱いはずの夏を私がそうしなかつただけだ。

「歳やなあ」と皺の深くなった顔を鏡に映しながら、冷めた汗を拭っていた。

了

「俳句」

よく笑う

入学式あの子もこの子もはにかんで

参観日かあさん見つけた子の笑顔

質問へ一斉に挙手 参観日



彩 さい

華 はな

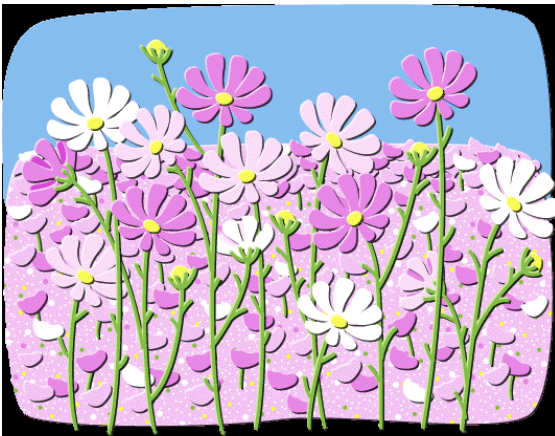
家庭訪問 道案内は子らと蝶

逆上がりできた子ほめる若葉風

燥ぐ子泣く子プール指導始まった

一年生の歌声 秋の教室に

秋桜 一年生のよく笑う



〔短歌〕

街路樹ロマン

高畠成子

冬なれば彩あやな衣いをすて正体みせ天そらに伸びする裸木らぎは男子おのこなり

〔俳句〕

高畠成子

母なる樹別離わかれて枯れ葉ひとり旅

〔俳句〕

京の秋

連なつて清涼殿へと萩の道

京の秋 維新の道を踏みしめる

彩さい

華はな



靈山に眠るは竜馬 伏見遠し

靈山から祇園・木屋町 薄紅葉

高台寺の庭石がとどむ秋入日



◆京都観光タクシーのHPからの転載。高台寺の公式HPには内部の写真もあるが掲載不可。

## 老人日記 2

百天翁伽

駅の階段を下りて、歩道にできると同時にたばこに火がつく。乗車中は「我慢の子」であったのだろうか、駅に向かう僕とすれ違うサラリーマンの三分の一近くが煙を吐いている。

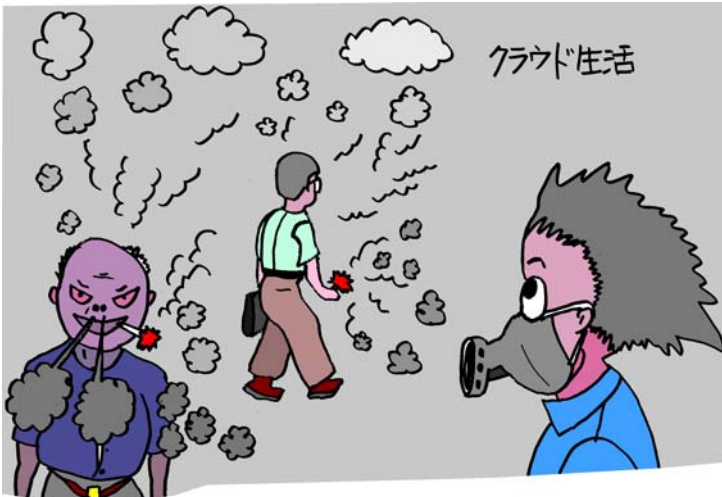
もちろん駅に向かう男性にもたばこ族が多い。駅に着けば指定場所でしたかたばこは吸えないし、それでは乗降に便利な位置とずれてしまう。だから駅に着く直前が最後の喫煙時なのだ。

「かなわんなあ」と僕は思う。

15年前に禁煙しているから、喫煙族の気持ちは分かる。

だが最早、臭いも煙も受けつけない。

禁煙当初はたばこに出会おうと「懐かしさ」、「禁断の誘い」であつても、迷惑ではなか



った。

2年もすると、吸いたいとも思わず、たまに行くとスナックなどでつい手を伸ばしても、後は吸いたいとは思わない。3年をすぎると何とも感じなくなつて、5年経つと、臭いや煙が鼻につきだし、7年目には、イヤな臭いになつた。

前に行く男性から吐き出される煙を避ける。時には追い越す。

「まったく、歩きたばこなんかするなよ」と、自分もしてたくせに腹が立つ。

吸いたいのは分かるが、もう時代も許さない。もちろん嗜好品として、或いはストレス解消に吸うのは自由だが、自分の個室で思う存分吸え

ばよい。

日本の喫煙率は年々下がっているとはいえ、先進国中では一番高い。たばこの値段は一番安い。

国民の健康より国策として金儲けがあるらしい。たばこを安く売り続ける理由としては「喫煙権」とか「個人の嗜好品」という主張をすることにはなっている。

しかしまあ、JTの必死のマナー向上のCMにもかかわらず、どうもマナーは低下していないか。

啜えたばこをしつつ片手に携帯を持ち運転する女性、助手席には赤ん坊。携帯が終わつたらたばこの灰を窓から落とす。

窓を開けて走る季節には後続車はたまらない。臭いと煙と、なんと灰まで飛び込んでくる。

さらに吸い終わると、火のついたままのそれが、道路にポトリと落とされる。

後を走る車に乗っているなら窓を閉めればすむ。が、歩いている横を走り去る車が

ら煙と灰と、時には火のついたたばこまで落とされると…。

「ほんまにもう、本質的に身体によくないんやぞ」

15年前までは、つまり前世紀までは、一日ふた箱のヘビースモーカーの僕は呷く。「ガンの原因にもなる…」

僕は自分の胃ガンの後をなでる。もちろんそこには胃はない。もつともたばこ直接関係するガンは気管支や肺ガンである。

「僕がすっていたのは15年前やぞ、20世紀やぞ」

そうである。もう21世紀に入つて10年になる。些か牽強付会だが、身体に悪いことが判つたのだから、世紀をまたいで続ける程のことではない。たばこは前々世紀、19世紀の遺物なのだ。古い習慣ではない。せいぜい江戸時代から広がつた習慣なのだから、悪いとなれば息の根が止まらねばならない。

ほんの4ヶ月ほど前に歴史的な政権交代を成し遂げた民主党は、たばこを倍くらいに値上げするらしい。たばこをやめる人も出るが、税収は1兆円とかも増えるとい

う。巧い値上げ幅だが、本当に健康にいけないのなら、「たばこをひと箱50000円にする」と長妻厚生労働大臣が言えばよい。税収はゼロに近くなるはずだ。

(いえないだろうなあ)

しかし、JT(日本たばこ産業)はもう他の品物で生き残る道筋ができたはずである。HPを覗くと、な、な、なんと、医薬品や食品の会社を傘下に置いている。

「だったら、もうやめても良いではないか」

たばこ族は「しやあないなあ」と全員、いずれそうなるあきらめの準備はできているのだ。

国民の幸せを考えるのが政治家や官僚ならば、そろそろ英断を!!

と書いていたら、1本5円の値上げだそう。300円のたばこが400円になるという。

「まあ、やめる人も出るやろけど…」

何とも中途半端だ。シンガポールなどではひと箱800円で、毎年劇的にあがつて

いくらしい。それでもなかなかなくなるならない。

僕がたばこ中毒だった経験からすると、『ひと箱2000円』くらいにすると、まあ大多数はたばこから手を引くだろう。

1本100円だ。月6万円。これは痛い。月給が30万前後の人が多いと思うが、さすがに6万円をたばこ代には出せない。節煙か禁煙に走るはずだ。

しかし『1本20円』だったら、あめ玉と同じだ。一日400円ならば、節煙効果も禁煙効果もあんまり期待できそうにない。

「そんなもんやろな」と思う。たばこ族、葉たばこ農家を敵に回したくないのはよくわかる。

けれど、なあ……。



〔川柳〕

激安ツアー車内にはびこる加齢臭

団塊の世代が山を占拠する

「あれ」「あの」で会話途切れる団塊世代

還暦を越えても気遣うバスの席

柴小路 秀磨





ばんつま  
「板妻」のわかる世代に墓教え

一言の多い家内がない夫

散歩道ホームレスの姿に安堵して

空腹という御馳走の旨さかな

先生も笑顔で走る防災訓練

決意してかけた電話は話し中



ならならばならならではのならならえ

◆東播磨文化団体連合会の機関紙「東はりま文化」に載せる原稿依頼が時々ある。

もちろん原稿料はないが、載る喜びと、書ける機会には感謝しなければなら  
ない。

内容は文学散歩や、各種団体（音楽・書道・詩吟・生け花・絵画…）の作家の  
記事などである。原稿用紙にして数枚という処か。また、機会があればご紹介し  
たいと思う。是非、書いてみて欲しい。

嘘つきメール

令月

私が一通のメールで幸せになっているのを知っている？

悲しくて涙しているのを知っている？

メールは便利だね…嘘をついてもばれない

『元気だよ。仕事頑張つて！』

ほら元気ですよ？

泣いてないでしょ？

でも本当はね…

声が聞きたいよ 泣いているんだよ 会いたい

んだよ 気付いてよ

優しさの詰まったメール達を見ながら膝に額を

押し付けて泣く

気持ち伝えるメールなのに伝えられない気持ち  
持ちが溜まっていく

無機質な携帯の手触りが悲しさと寂しさを募  
らせる

いつもと変わらないメールを見て嬉しい反面悲  
しかった

いつもと変わらないメールを返しつつ涙が止ら  
なかつた

声が聞きたいよ

メールの文字はあなたの言葉だけど声じゃない  
送信完了の文字が「さよなら」と告げているよ  
うだつた

もう明日までメールは来ないのだと心が呟いた

電話しちやえと頭が嘔いた

アドレス帳を開けば簡単に出てくる番号

ボタン一つで繋がることを知っていたけどそれが怖かった

限らない不安が浮かんできてボタンを押せないでも本当に怖いのは嫌われてしまうこと

それが何よりも怖くて押せないのを知っている

そして切られた後の喪失感を知っているからだから電話をしない

声が聞きたいよ 泣いているんだよ 会いたくないよ 気付いてよ

それでもきつと私は明日もメールが来れば笑うんだらう

そして『大丈夫だよ』と打って送信するんだらう

携帯の画面が涙で滲んだ

## 砂の星間旅行

今月

さあ出かけよう。準備は何も要らない。

これから出掛けるのは皆がよく知っている宇宙だから。色んな星を案内するよ。さ、急いで急いで、マグマがすぐ足元まで上がってきた。

早く出発しないとマグマに飲み込まれてしまう。

先ずは火星へご招待。火星は星一面に赤くて熱い砂が敷かれているんだ。でも、気をつけな

いと…顔に付くと、顔が黒くなってしまつて大変だからね。

おつと、強い風が吹いてきた。火星は強い風が吹くんだ。飛ばされないように…あ、あつたあつた！あそこに鉄棒があるから…まつて。鉄棒にまつていれば絶対に飛ばされない。火星では、鉄棒が一番強くて、何でも跳ね返すんだよ。

さ、風がやんだよ。今のうちに火星を出発しよう。

お次は水星。この星では皆が泳ぐんだよ。それもきつちりと順番があつてね。最初は浮き輪を使つてふわふわ浮く練習からする。次はビート版、その次にクロールを練習する。しっかりと練習しないと溺れちゃうよ。

全部が上手に出来たら、最後はサーフィンを

するんだ。

とつても大きな波が来るからそれに乗つて次の星まで行くんだよ。

泳いで疲れたら、木星で休憩しよう。

木星には花と楽器しかないんだけど、その花は魔法のお花。このお花を相手に投げると、相手は弱つてしまふんだよ。だから投げちゃ駄目だよ。

そして楽器も沢山あるけど、水星と同じで順番が決まつてる。最初はカスタネットから始めるんだよ。そして、次の次の次は大太鼓。その前は小太鼓で、更にその前はピアノニカやね。みんな演奏すると魔法のお花は色を変えるんだ。楽しい音楽だと黄色やオレンジになるけど、泣いたり、悲しい音楽だと黒くなつたりするんだ。

さ、楽しい音楽を聴いたら出発だよ。

休憩が終わったなら金星。

金星には丸い輪っかがあるんだよ。えゝと：寝るときに明るいやつあるでしょ？そうそう、電気！その電気の中にある丸くて白いやつ。あ、フラフープにそっくりな形してるやつだけど、それがあるんだよ。それを相手に投げると、相手の動きをとめることができるんだよ。

それでね、金星にはスポーツしかないんだ。今日は急いでいるから出来ないけどね。

それでは、最後の大目玉！太陽へと参りましょう。

太陽はとっても熱くて、常に5000°Cのオーバーヒートをしているんだ。太陽の大きさは50000kmで、とっても大きく思うかもしれないけど太陽よりも大きい星があるんだよ。

アンギリウスっていう名前の大きな星。知ってる？

今日はアンギリウスには行かないけどね…。

それでは今日の旅行はおしまいです。

もう時間が来ちゃったから：先生またね、また明日。

明日来たら、お話してあげる。

先生が知らないことも、僕は知ってるからね。いっぱいいっぱい教えてあげる。



願掛け

大西裕子

願掛けつて知つてるかい

願いが叶うまで何かを断つんだ

だから自分は願掛けをした

君の側にいけない代わりに

君が幸せであるようにと

でもその願いは無駄だったのかな

君は大切なものを失い

そして君自身も光を失った

自分が願ったのは何だったのだろう

呆然と考えてみた

暗いくらい部屋の中

君の報せを聞いた

隙間から入る夕日の色

君が流したであろう色に見えて

そつと目を閉じた

君の叫び声が聞こえてきそう  
で

耳を塞ぎそうになる手を握りしめた

君の涙が落ちてきそう  
で

逃げそうになる足を叱咤した

君の「嘘つき」という声が怖くて

自分は何も知らなかったのだと逃げ道

を作った

いけなかったのだろう

どうして自分が背負えなかったんだろ

う

どうして自分が代われなかったんだろ

う

どうして自分が…君を守ると誓ったのに

ね

君の幸せを願った

君の笑顔が続くようにと

伸ばした髪が重かった

どれほどの涙を流し

どれほどの痛みを味わい

どれほどの悲しみを得たのだろう

どうして君がそれらを背負わなければ



伸ばした髪は君への想い

君が笑顔でいられるように

君が幸せでいられるように

伸び続ける髪に祈りを込めた

それでも時は残酷だったね

人の気持ちも知らないで

君にばかり辛い現実を押しつける

どうして君なんだろうね

どうして自分じゃないんだろうね

世の中の不公平さを嘆いてみる

この世に神などいない

神がいるなら

どうして君は涙を堪える

神の存在を知りながら

神などいないと言う

神などいない

神などいない

いるのは自らを神と思う愚か者

いるのは誰一人として救えない救世主

いるのは：守れない約束をした愚かな

自分

「短歌」

2ヶ月の長い道のり終え夫(つま)をお疲れさまとそつとねぎらう

水田竜子

何事もない時願うひたすらに神に仏にとどきたまえよ

病気の事情

高畠成子

凄まじき老いと病の前哨戦

三つ巴

冬將軍木枯しつれて一周り金鳥うつつの中に直下降

老々と背を叩かれ振りむけば老いと病にはがいじめふいをつかれた我が  
足と手はなえて丸太の様になりP氏病にPされて我はとうとうギョウニ  
ール人形になる

### 例会報告

※詳細は「アクトス通信」に掲載。

場所は 兵庫県学校厚生会サンピア明石会議室 C  
第13会例会

平成22年1月9日(土)午後6時

40分程、新年の挨拶と合評。5名参加。あとは『はたごや』で新年会。  
これには7名が集まり、9時前まで賑やかに行った。(生一朗)



## 同人募集

# アクトス -文藝集団-

新しい文芸グループ「アクトス」をたちあげました。携帯・パソコンからのインターネット参加を歓迎します。楽しく『和』を大切にします。

### 活動内容

- 1 特定のジャンルではなく文筆全般にわたります。
  - ①創作 ②合評(例会) ③同人誌(アクトス)の年4回発行
- 2 参加資格はありません。「書きたいという気持ち」だけで結構です。
- 3 義務は ①会費、月額1000円 入会金なし[学生は月額500円]  
(会費には同人誌代・郵送費等の事務費含む)

※1年分前納。(前期・後期の2回分納可)

(途中入会は半年単位で考えます。納められた会費は返金しません。)

▶活動の具体は、以下の通りです。

- ①作品の提出(3月、6月、9月、12月末) - 5、8、11、2月の4回、同人誌(アクトス)発行。無料で2部受け取る。  
(余分に必要時、作品提出時に申し込む、頒価1部500円。)
- ②各月第二土曜日 学校厚生会明石サンピア 午後3時~  
(例会出席は自由です。出席したときは、会場代・茶菓代などとして1000円必要)
- ③概ね年に一度、アクトス文学賞を選考・表彰

**※携帯あるいはネットだけの参加も可能です。 ※ペンネーム推奨。**

作品の提出は、携帯メール(詩・短歌・俳句など)、パソコンメール(エッセイ・小説・紀行など)で行います。扱えない方は、相談させて頂いて郵送も可能とします。

例会後は懇親会、また旅行などもおこなっています。

運営は当分の間、例会などで相談・連絡の上、会長が決定しておこないます。



平成21年1月1日 アクトス会長 大西生一朗

連絡先: 〒673-0031

兵庫県明石市宮の上1の17の614 大西方 アクトス編集室

Tel&Fax 078-922-4562

メール: [actos2008@mbe.nifty.com](mailto:actos2008@mbe.nifty.com)

◆HP <http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

◆携帯 <http://www.justmystage.com/home/actos2008/Top.htm> [2009/11/7改訂]

## 競演 第二回 ほし

第8回の例会で、「タイトル」を決めて作品をかいてみれば面白いのではないか、ということになりました。第一回のタイトルは『あつい夏』でした。今回は第二回。タイトルは「ほし」です。星・★・干し・乾し…と、「あつい夏」の「あつい」より難しいかも知れませんが、タイトルから飛躍してもよし、さて、どのような作品が寄せられたでしょうか？

干し

水田竜子

軒下にすだれのような干し柿よきのうのごとく  
瞼に浮かぶ

柿むいて手渡す子らの小さき手祖母にねだりて干す柿の味

ひとつ食べ又ひとつへと手がのびる干し柿の味今も忘れん



王に捧げる神の愛

ギリシヤ神話 アルテミスとオリオンの悲劇より

令月

大気が澄む冬の夜

貴方は夜空を駆け上がる

右手に雄雄しく武器を持ち

左手に獅子の毛皮を掲げ持ち

二匹の猟犬従えて

今宵も狩りへと繰り出せり

今宵の獲物は何とする

遠く夜空を見渡して獲物は何処いずこと探し出す  
うさぎは夜空を跳ね回り

鳥は西へと飛び立てり

犬は主の命令を今か今かと待ちわびる

過去に地上を駆け抜けた

勇ましき狩人かりうどは

遠く夜空の星となり

星座の王と成りたもう

愛しき人は星となり



夜空を永久とわに駆け巡る

私は毎夜姿を変え

変わらぬ貴方と夜空を駆ける

地上で離れた哀しさを

決して忘れはしないから

決して繰り返さないから

今宵も私は手綱を握り

夜の星空駆け巡り

愛しい貴方に会いに行く

くうの星

バーラ  
カッシー

満天の星空を仰ぎ

大きく息を吸い込み

「ふー」と吐く

重ねたグラスのワインが

程良く身体を巡り 気怠さを誘う

静かに目を閉じれば

自分の中の宇宙像が

天空を駆け迷<sup>サマヨ</sup>う

どこまでも透明な 無機質の空間

三次元から四次元へのカラビ

儘ママの皮身を委せば

矢衾の如く突き刺さる熱き光

目もあやに降紛う 光の回廊

スターダストと呼ばれる星たち

新星の爆発の残骸

何光年もの時を経て 届く光

カラビーヤウ多様体から

空間の異なる領域を侵す

神秘的な光が

重力により

虚像から実像へ

湧きあがる 不安と恐怖に

戦慄が走る

目を見開き 擬視すれど

星の輝きは遠く冷光となり

透明な静寂に包まれた闇に

白く吐く息も消え尽く



星<sup>せい</sup>

明達光輝

緑の風が吹いていた。

男がいた。

ずいぶん長い間、座っていたような気がしたが、二、三時間足らずであつたかも知れない。陽は地平に傾いてはいたが、まだ黄金色の熱線を放っていた。男の頭上の深い木々がそれを遮っている。

「ありがとう……」

彼は透き通つた声で小さく呟いた。それは男の頭の中に反響しただけである。だが、木の葉が身を細かく打ち振つたように思えた。

木々は、葉の表面から目に見えぬ程の水蒸気を放出し、太陽熱から自分自身を守っている。その営み自体が彼のためにもなっていた。

腹は減っていない。喉も渴いていない。

風が薄い絹衣のように身体にまとわりついていた。

「日没までいるか……」

彼は自身に話しかけ、胡座続きで少しだるくなつた尻を持ち上げ、身体を左右に揺ると、再び木の幹に背をもたせかけた。

目を閉じると、ありとあらゆる情報が遮断された。

人の五感を通して行われる情報吸収の割合は視覚が60%、聴覚が20%、触覚15%、嗅覚3%、味覚2%と言われる。

眼前の川岸の灌木や草花、群青色の流れに踊り交う陽の光、向こう岸の海のような草原と彼方の低い灰色の山並み。それらが消えてまぶたの裏に残像が残るだけになった。代わりに、音が蘇り、香りが生き返った。川の流れ、草原の草ずれの音、鳥の声、風の息吹、光の囁き。水の香り、草いきれ、光の香り。木の葉と土の臭い、沐浴の後の彼自身の臭い。背中からは木のたてる体内音と、大地の波動が体内に侵入し、彼の鼓動とともに波打った。

彼は彼を包む自然とともにあつた。空間の中に溶け込み、その一部となつた。

やがて水の音は、次第に聴覚から消え、頬を撫でる風も感じなくなつた。木の葉の音も散つた。鼻腔は香りを感じなくなり、やがて消えた。

思念の波が大脳皮質を覆い、溢れた。

妻とは別れた。

「君を、愛している。だが……、去る」

という身勝手な彼の言葉を、彼女は傷ついて聞いたに違いない。

彼に別の女がいるわけでもなかつた。ただ彼は愛している妻と別れねばならなかつた。

「本当にそうしなければならなかつたのか」という迷いは、最早なかつた。進む道はそこしかなかつた。

彼は感情の波を理性で静めた。

彼はゆつくりと息を吐き、僅かに唇を開いたままにした。体内の気と大気が渾然

一体になり、熱い力が抜けた。目を閉じると、脳内の意識が踊り出す危険がある。彼は呼吸とともに、世界の律動を体内に取り入れたのである。

陽の光の音がした。

彼は目をそつとあけて、慌てて再び閉じた。

色彩の洪水が押し寄せたからである。

かすかに苦笑しつつ、彼は再びまぶたを半分を開いた。

光がゆるやかに、朝霧の如く忍び込んでくる。

「見えた……」

薄い色彩の中に、水面と青空が、草原と山並みが、息をのむ程に鮮明に写し出された。その姿はくつきりとしかも静かに心に刻み込まれていく。

「見る」とは、外を見ると同時に、自己の内面にあるものを見る。それは通常危ういバランスだが、彼は意識せずしてそれを成し遂げていた。

彼は微笑んで、再び目を閉じた。



時の流れに自己が埋没していくのが感じられた。

情動と知性が世界理性へと昇華した。

心も、そして驚くべき事に肉体までもが、世界と共にある一個の存在と化して、時空を揺蕩う。

どれくらいそれを楽しんでいたであろうか。

ふつと冷気が彼の髪を撫で、鼻腔をかすめた気がした。

彼は瞬きながら瞳をあけた。

光が姿を消して、夜が顔を出していた。

川面に踊る銀色の砂は、星々が彼の目を楽しめるための届け物であった。

顔を上げると橙色のマガーが見えた。この星は、孤独な星である。

「私のようにだ」

彼は思った。

総てを見ることが出来たが、それは彼だけのものであった。心は晴れ晴れとしていた

が、僅かなわだかまりがあった。

「去りたまえ」

突然音がした。

決然とした明るい声であつた。

「それはあなただけのもの。あなたしか理解し得ないこと。それで世界は十分に満足し、他に何も望みはしない」

声は彼の心から出ていた。それは彼であり彼ではなかつた。

「最早求めた。余人に理解しがたい」声は続ける。「去りたまえ。人生を楽しみたまえ」

もう一人の、彼の内面からにじみ出た彼は、更に続けた。

「苦悩のない生き生きとした相貌、見開かれた目、紅い唇、輝く光背。それを持つて去りたまえ」

彼の内心に衝撃が走つた。

それは彼の意識の下にある強い願望であつた。覚者として敬われ、自身は身も心も軽く好きに生きる。

他者の苦悩は自己のものとはしない、ともに歩まない。道は示すが助けはしない。

「私は苦悩がないのか……」

彼は彼自身をのぞき込み、本来の彼自身を見つけた。

それは彼だけのものを説かねならないことであり、苦難の道の始まりであることであつた。そして彼は、そのことが成せることであることも、見ることに同時に、瞬時に理解していた。僅かなわだかまり、僅かな苦悩こそ、最高の喜びを得る道でもあつた。他者の苦悩を自らのものとすることは、彼にとつて僅かな苦悩に過ぎなくなつていたのである。

好きに生きる自由は、他者の心に縛られることで、真の自由となり得た。迷いやわだかまりを自己のものとするところこそ喜びであつた。

「説きたまえ」

声が大気の揺らめきとなつて彼の身体を包んだ。マガアの光が、一筋の光芒が彼の額を打った。

「説きたまえ」

再び声がした。

苦難が喜びであることも、定めであることも既に判っていた。

黙つて立ち去ることも出来る。彼が成さずともいつか誰かがその道を歩み出すであろう。そしてその誰かとは、はるか未来の彼であることも了解していた。

彼はゆるやかに口の端に微笑を浮かべた。

覚者は如来に昇った。

ゴードマは、大地を引き連れて立ち上がった。

了

※星(せい)、二十八宿の一つ、梵語でマガア。アルファルドともいうが、それはアラビア語由来。意味は「孤独なもの」。

◆編集について

※字の大きさは編集の方で、収まるように配置します。従って、「小さくなる」場合や「大きくなる」場合、多段になったりする時もあります。次号以下に繰り越す事も出てきます。また、掲載の順序なども、順不同で、編集が適宜配置します。

※一回分は概ね最大2000字程度(400字詰め5枚)としますが、内容・提出数などによつて、変更します。原則、一ジャンル一作品。複数ジャンル(複数作品)も可です。但し、編集によつて掲載の可否は判断します。

※原稿は原則デジタルデータとします。返却しません。紙原稿の場合も大きな活字で印字してお送り下さい。万一、手書きの場合も含め、短いものにして下さい。入力を手分けして行います。※メール添付の場合、末尾に空白がたくさん入つていたり、「`—`」マークは使わないで「`—`」にして下さい。また、タイトル作者名を本文中に入れておいてください。※総てコピーをおとりの上提出下さい。

※カットは、書かれる方があれば、カラー・白黒を問わず使用します。ただ、大きさや配置については一任していただきます。また印刷は家庭用プリンターで紙質も良くないのをご了承下さい。写真も同じです。返却しません。コピーをおとりの上提出下さい。また、出来る限りデジタルデータ、`jpg`・`gif`と言った形式で提出下さい。

※校正は原則行わず。いただいたものはそのまま掲載します。協議の必要があるものは大西と著者で行います。

◆会の組織について

※設立後、一年を越えました。会員数も当初の9名から16名となりました。

※会長が総てを行ってきましたが、少しずつ形を整えたいと思います。よろしくご協力ください。

◆第14回は2/13(土)です。15時から サンピア明石

以後も第二土曜日、15時からの予定です。出欠のご連絡は不要です。

※参加希望の方は会費を納められた上、編集室までご連絡下さい。詳細をご案内します。

※アクトスのHPは、<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

※アクトスの携帯電話用HPは、<http://www.justmystage.com/home/actos2008/Top.htm>

「携帯電話でアクトスHPー携帯用画面ーを見ることが出来ます。」

※アクトスは「行動する人」の意。 ◆パソコン用HPに掲示板を作成しました。ご利用ください。

編集室から

◆第『5号』である。

トップに、まずは第4号で提出いただきながら掲載できなかった作品を配置した。

編集しているのは暖かい大寒であるが、さすがに冬まったただ中、「あつい」作品とはいえ、暖かくしてお読みいただきたい。

今回は募集期間が短かったので、どれだけ作品が集まるか不安であったが、や

はり少し不足していた。年末年始は誰も落ち着いている様で慌ただしく、なかなか机に向かつてじっくりと、とは行かないであろう。

『競演』は第2回。

『ほし』というタイトルは、「あつい」より類推するのが難しく、僕も四苦八苦だった。

みなさんも苦労された様だ。「なるほど、みんなが、バツとひらめくようなタイトルが必要なんだ」と改めて思い知った。

新年会も7名が来られて、盛会であった。

さて、僕は講演会などで会員を募集しているが、何か新しい方法はないだろうか。

常に新陳代謝していないと組織は停滞してしまう。

仲間を大切にし、和の精神で大きな流れにしていきたい。

【生一朗】



次号(第6号)は  
原稿締め切りは3月末。

2ヶ月ありますので、いつもは挑戦しないようなジャンルにも手を染めてみてはどうでしょうか。

童話や、戯曲なども歓迎します。変わったところでは落語や漫才の台本(誰か演者をイメージしつつ書く)と面白いものが出来ます。例えば林家染二向きの新作落語、と言う具合です。戯曲なども、木村拓哉向きの台本という調子です。)でも…。

◆競演第3回

今回は話し合う時間がありませんので、私の方で「はる」とテーマを決めました。「貼る・張る・春ハル」など、作品をお送りください。

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
  - ②〒・住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業  
を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
- 〒673 - 0031 明石市宮ノ上1の17の614  
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900 - 5 - 39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会ー毎月第二土曜日

※午後ー3時～5時

◆場所 サンピア明石

TEL 673-0882

明石市相生町2丁目9番20号

TEL (078) 911-2250(代表)

FAX (078) 913-1140

JR・山電明石駅から南東へ徒歩約10分

市バス「保健センター前」下車すぐ

立体駐車場有(有料)

---

アクトス 第5号

平成二十二年二月一日

編集 大西生一朗

いichろう

発行

673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社 「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)500円

---